

[ 資 料 ]

# 2020年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫



## 2020年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫

代表理事 杉 浦 康 之

2020年4月1日～2021年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業の概要は下記の通りです。

### 事 業 目 的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

### 事 業 項 目

概 要.....	2
I アジア基礎資料研究.....	6
II 資料収集・整理.....	24
III 資料研究成果発信.....	26
IV 普及活動 .....	27
V 学術情報提供.....	31

## 概 要

### I 研究事業の全体構想

東洋文庫は、1924年、欧文貴重書 1,100 点余を含む欧文図書資料からなるモリソン (G. E. Morrison) コレクション、ならびに和漢の貴重古典籍からなる岩崎文庫を中核として、岩崎久彌氏によって、アジアの貴重図書資料に関する民間の研究図書館として創設された。その後 90 年以上にわたり、一貫してこれらの貴重図書資料を中核とする 100 万冊に及ぶアジア諸地域の現地語資料を継続的・系統的に収集し、それらのすべてを散逸させることなく保存・管理し、同時に広く世界の研究者ならびに一般に向けて公開することを目的とした事業を進めてきた。

研究事業の長期的な目的は、これらのアジア研究に関する貴重図書資料を保存・管理・公開し、なおかつアジア現地語資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。このような研究事業を 280 名に及ぶ研究員を擁して推進する類似の民間の研究図書館は国内には存在せず、世界的に見ても稀有な存在であり、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫が世界的に高く評価される理由であると同時に、長年にわたって蓄積されてきた特色ある研究を継続的に推進することは、世界のアジア研究者が切望するところでもある。

### II 特定奨励費による研究事業の目的

東洋文庫は、「I 研究事業の全体構想」に述べた事業目的をさらに効果的に実現するために、これらの基本的な課題を推進する中で、2012 年度以来、以下の点に一層重点を置いて、特定奨励費による研究事業を推進してきた。

- (1) 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の教訓を踏まえ、貴重資料に関する書誌的資料研究をより一層強化し、併せて貴重資料の修復・保管・複製化・電子化という連続した資料保存とその公開をより系統的かつ持続的に推進する。
- (2) 大きく変動するアジア＝世界情勢に対応する研究として、東洋文庫のすべての研究班の連携によって構成される「総合アジア圏域研究班」を設置し、主題研究、地域研究、資料研究を連結した「総合アジア圏域研究」を全アジア的視野から推進する研究体制を構築する。
- (3) 「総合アジア圏域研究」に伴う資料交流・人的交流・国際交流を一層推進し、電子化などによって研究成果を広く発信し、国際的な発信力を強化する。
- (4) 東洋文庫における資料研究・総合アジア圏域研究・国際交流・国際発信などの基本事業に不可欠な若手人材を育成する。

特に 2016 年度より、(1) アジア資料研究データベースの構築（試行期）、(2) 資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進、(3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進、(4) 研究成果の刊行・発信の強化、(5) 若手研究者の育成、という 5 点の重点事業目標を設定して、研究班によるアジア現地研究・資料調査と収集を基礎に、研究データの保存・管理・公開を一体化した総合的アジア研究データベースの構築を推進すると共に、東洋文庫の刊行物ならびに各種講演会・講習会ならびにミュージアムによる経常的な公開展示などの取り組みを通して、ひろく内外にその研究成果を発信している。

資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進についていえば、系統的かつ継続的にアジアの各地域に関する現地の原語資料を収集し、それを現地の研究者・研究機関と共同して整理・編集して目録を作成し、世界の研究者の用に供している。特徴的な活動としては、中央アジア研究において、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所との協力関係・信頼関係のもと、中央アジア出土のウイグル文書の編集を共同で行い、20 年間にわたり目録の編集を継続して行い、現在はこれをデータベース化してデータの充実に取り組みつつ内部公開し、外部公開のための協議を行っている。同様に、協力協定

機関であるアメリカのハーバード・エンチン研究所や、台湾の中央研究院などとの間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって継続的に行われる研究活動は、個人や研究グループが短期的に実現できるものではなく、東洋文庫が研究図書館として実施するのにふさわしい事業であるといえる。

アジア資料研究データベースの構築についていえば、(1) 資料、(2) 研究 (分類・目録・索引など)、(3) 成果、の三者を一体化した総合的アジア研究データベースの作成と、それによる研究データの保存管理、成果の公開発信を目的とするものである。具体的には、アジア各地域の原資料のデジタル化と分析・解読を基礎とし、これに関連する研究情報をメタデータとして付加し、多分野にわたる研究を横断的かつ通時的に検索することが可能な汎用性の高い総合的研究データベース・システムを構築するべく取り組んでいる。これはアジアに関する基礎資料研究の長い伝統と蓄積を有する東洋文庫だからこそ可能であると同時に、学術団体としての東洋文庫の特徴を十分に体現しうるものとする。

### III 2018～2020 年度の重点事業目標

東洋文庫の基本的な事業を継続的に推進するなかで、2018～2020 年度において重点的に取り組む主要な事業項目を以下に掲げる。

- (1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開
- (2) 総合的アジア研究データベースの推進 (開発期)
- (3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進
- (4) 研究成果の刊行・発信の強化
- (5) 若手研究者の育成

アジア基礎資料研究については、従来の研究班主体の調査研究体制を改め、研究部執行部の主導のもとアジアのすべての地域に跨がる資料の収集、保存、公開、研究が一体化した、東洋文庫の伝統と蓄積を継承・発展させる基礎資料研究の構築に重点を置く。特に、すべての研究班が参画する総合アジア圏域研究班において、アジア各地の資料に用いられた紙に対して新たに導入する精密顕微鏡による精密調査を行い、地域別・時代別の紙質分布データベースを構築することで、資料の研究・保存・公開の各方面に有効活用できる基礎データを蓄積し、東洋文庫の伝統であるアジア資料学をより深化・展開させることを目指す。また、総合的アジア研究データベースの構築は、2018～2020 年度においてもっとも重点を置いている項目の一つであり、2015～2017 年度の「アジア資料研究データベースの構築」を試行期、今期を開発期に位置づけ、データ収集、システム開発において完成の域に達することを目標としている。

特定奨励費による本研究事業は、基本的には、アジアに関する資料の収集・保存、研究、公開の一体化とそのための効果的な事業運営に特徴がある。具体的には、【資料の収集・保存】研究者による資料 (国内外の専門書・和漢洋の古典籍) の収集、多言語に通じた司書による蔵書資料検索データベースの充実、専門家による和漢洋古典籍の保存修復、【研究】研究者によるアジア基礎資料研究、研究者によって蓄積された研究データ (研究資源・研究成果) の保存・活用、若手理系研究者との共同による総合アジア研究データベースの構築および他機関で作成された資料研究データベースとの連携、すべての研究班による総合アジア圏域研究国際シンポジウムの開催、ハーバード・エンチン研究所、ECAF (European Consortium for Asian Field Study) を始め協定機関との国際連携の強化、【公開】収集した書籍の蔵書・資料検索データベースによる公開、蓄積された研究データの総合的アジア研究データベースによる公開、定期刊行物・オンラインジャーナル・論叢等出版物・機関リポジトリ「ERNEST」 (<https://toyobunko.repo.nii.ac.jp/>) による研究成果の発信、内外の研究者による広く一般に向けた東洋学講座の開催、外国人研究者による特別講演会の開催、東洋文庫の蔵書に通暁した学芸員によるミュージアムの企画展示などに対し、研究員・司書・学芸員が一丸となって取り組むことで、アジア研究の総合的研究水準を高めると同時に、東洋学に携わる後進の育成と一般への普及に貢献することを目指す。

#### IV 研究事業の効果

研究事業の効果について、2018～2020年度の重点研究事業である紙料調査を中心に述べる。

##### A. アジア基礎資料研究

東洋文庫が所蔵するアジア関連の図書・資料は洋書 30 万冊、和漢書 70 万冊に上り、書写・印刷時期は、洋書は 15 世紀、和漢書は 8 世紀を筆頭に、それぞれ現代におよび、書写・印刷地域は、アジアとヨーロッパを中心とした全世界に及んでおり、しかも、そのすべてが原典である。このように広範かつアジアに集中した内外の図書・資料を保管・公開して世界のアジア研究者の用に供し、併せて 280 名に及ぶ研究員がアジア資料研究に従事する研究図書館は世界に類を見ないと言える。これらの蔵書を維持・管理することは東洋文庫に課せられた使命であり、その記述資料を保存・修復するためには、資料の素材である紙質・紙料の分析が不可欠である。この紙料調査を東洋文庫所蔵資料とアジア諸地域の現地資料館との双方において進めることを、3 年間の重点事業として計画している。

紙質調査の効果は、諸方面に期待できる。アジア各地の紙の製法・特徴を明らかにすることで、資料に用いられた紙の製造時期・地域が特定できるようになり、ヨーロッパに輸出されたアジアの紙が、印刷された後にアジアにもたらされるなど、紙という文化資源の国際流通の実態や、紙の流通を背景とした書籍流通による知的文化交流の実態が明らかとなる。例えば、古代から楮、三桮で紙を漉いたアジアに比較して、ヨーロッパではリネンや羊皮紙が用いられ、紙文化の好対照をなしている。東洋文庫所蔵資料は時代的にも空間的にも、世界のアジア関連の書籍資料の全体をカバーしており、紙料の標本と紙質の標準を提示するにふさわしい研究を行う条件が整っている。



精密顕微鏡によるインキュナブラの調査風景

本研究項目は、全研究班が参画する総合アジア圏域研究によるアジア基礎資料研究において、東洋文庫をはじめ国内外の文献資料の研究・保存修復・公開（閲覧・展示）を目的に紙質調査を行い、時代・地域と関連づけた紙質分析データのマトリックスを作成し、国際標準として国内外に発信することを目指している。

具体的な取り組みとしては、紙譜（紙の素材資料集）、15 世紀のインキュナブラやマニユスクリプトをはじめとする古今東西の古典籍、紙関係の辞書・研究書・図録等を収集し、若手研究者の協力のもと精密顕微鏡によるサンプル調査を実施し、今後の長期的な調査のための土台づくりを進めている。

##### B. 資料収集・整理

資料収集においても、国内の資料館・図書館と連携し、アジア関連紙料の調査および整理を進めることで、東洋文庫が作成する紙質分析データのマトリックスの一層の充実を図る。また海外の連携研究機関と協力して紙質調査を行い、東西比較に基づく国際的な紙料の分析・分類を行う。同時に、様々な素材・地域で書写・印刷された資料に対して最適の修復・保存方法を検討・実施する。

具体的な取り組みとしては、2018 年度より、若手研究者を中心に、書誌学者・歴史学者・保存修復技術者・情報学専門家からなる紙質調査チームを結成し、資料の保存・修復の観点に立った調査が可能な体制を構築した。

##### C. 資料研究成果発信

文理融合型アジア資料学研究シリーズとして、これまで開催してきた講習会・講演会・研究

会をより幅広い時代・地域を対象に開催し、紙質そのものの歴史的特徴のみならず、同時代における文献・書物の格式と、用いられた紙との関係性を明らかにし、紙料に託された社会的役割を吟味する。また、東洋文庫所蔵資料の紙料をもとに作成された紙質分布データベースが、国際的な標準たり得るよう、国内外の資料館と連携して、より一層の充実を図ることも必要不可欠である。

具体的な取り組みとしては、紙質分布データベースによる研究成果発信を、より効果的に推進するため、2019年度に国内研究機関とのデータベース連携の検討を開始した。

#### D. 普及活動

紙料調査は単なる素材分析にとどまらず、紙の特徴から版本の刊行された時代・地域・文化的背景を特定することができる。その成果を、講習会や展示会等の普及活動を通して対外的に発信することで、紙料研究の重要性に対する認知度が高まり、紙とアジアの深いつながりに対する社会的な関心を喚起することができる。また、接写用デジタルカメラを使って資料の特徴を簡易的に捉えることもできるので、この方法を対外的に広めることで、アジア諸地域の歴史資料の収集・整理・保存修復に取り組む資料館や、それらを用いて研究する若手研究者の育成に大きく貢献することができる。

具体的な取り組みとしては、2018年度に紙質調査の一般への普及を目的に、国宝『毛詩』、13世紀刊行の高麗大蔵経、18世紀のトルコで刊行された『世界の鏡』等の紙質調査を行い、その結果を東洋文庫ミュージアムで展示した。

最後に、2018年度より開始した「東洋文庫奨励研究員制度」は、若手研究者の育成および雇用促進のための体制を一層充実させるものであり、ひいては、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施を可能にし、かつ東洋学の伝統の継承と発展に大きく寄与するものである。その効果は東洋文庫の内部のみにとどまるものではなく、将来にわたって世界の研究者を裨益するとともに、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く一般の方々に伝える公益性の高いものとなろう。

## I. アジア基礎資料研究

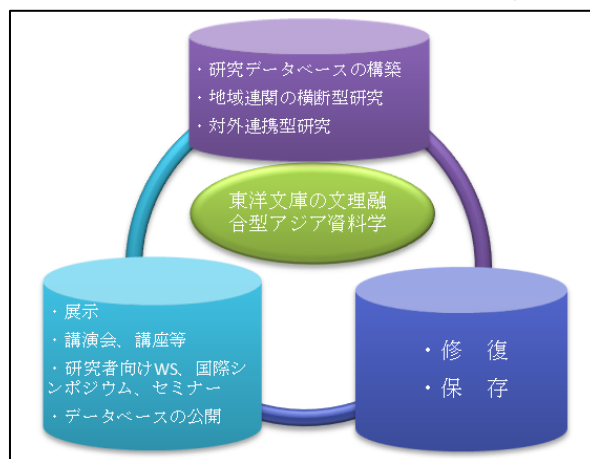
2018年度より、従来のアジア各地域の特徴に沿った研究班・研究グループ主体の調査研究を、研究部執行部の主導のもとに統括され、資料の収集、保存、公開、研究が一体化した、東洋文庫の学問的伝統と蓄積、および国内外の研究ネットワークを継承・発展させる研究体制に改編し、「紙料」調査を中心としてアジア諸地域を横断的に比較総合する「アジア基礎資料研究」に重点を置くこととした。具体的には、研究部執行部が統括する5つの重点事業目標（前掲「概要」の「Ⅲ 2018～2020年度の重点事業目標」を参照）に基づき、西は北アフリカから東は日本までをカバーする全6研究部門13研究班が、20の基礎資料研究テーマ（p.23「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照）を設定して相互に連絡・連携を保ちながら、東洋文庫が収集・所蔵する一次資料の文献学的分析（解題・目録・訳註等の作成）と、それに基づく「紙料」研究を持続的に推進した。これらの研究班・研究グループの諸活動は「総合アジア圏域研究」のもとに連結することで、アジア諸地域の歴史と文化の地域連関と相互影響について、アジア全体を視野に入れた学際的共同研究を推進し、現代アジアの複合的・動的な把握につとめ、その研究成果を、講演会、刊行物、オンラインジャーナル、研究データベース、ミュージアム展示など多様な方法で発信、公開、普及すべく取り組んだ。

5つの重点事業目標のうち、研究部執行部では、特に研究データベースの構築と若手研究者の育成に力を入れており、他の3項目（アジア基礎資料研究の構築と現地研究機関との共同研究、国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流、研究成果の刊行・発信）の実施においても常にこの2項目と密接に関連するよう留意して取り組んだ。以下、項目別に記述する。

### (1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開

担当：會谷佳光  
相原佳之  
小澤一郎

東洋文庫は、国内外を通じて、専門の保存修復室を持つ数少ない研究機関の一つである。資料の素材調査の目的とその意義は、東洋文庫における研究活動・閲覧公開・ミュージアム展示などのすべての局面において、日常的に調査を実施して、その成果を蓄積し保存修復に活用することで、東洋文庫が収集した古今東西の貴重資料を永く後世に伝承することにある。さらに、その成果を研究データベース化して広く発信することで、国内外のアジア関係資料を連携して保存修復・研究・伝承することに貢献することが可能となる。すなわち資料の素材調査と研究データベースによる成果発信は一体不可分であり、東洋文庫が研究図書館として取り組む特色ある研究活動の中心をなす課題であると言える。



そこで、2012年度以来、東洋文庫では、故藤枝晃京都大学名誉教授による敦煌出土文書の古写本研究を基礎に、藤枝氏の学問を継承する石塚晴通研究員と、理系研究者としての視点から精密顕微鏡による敦煌文書等の紙質分析で成果を上げてきた江南和幸研究員の指導のもと、東洋文庫の蔵書を使った素材調査をアジア各地域の資料に対して実施する研究を行い、データの蓄積を進め、それらの成果を継続的に公開講座「アジア資料学研究シリーズ」などを通して明らかにしてきた。

とりわけ強調すべき点は事業遂行のための実施体制の確立である。今回の事業計画の中核をなす紙質研究は、研究者個人の経験と熟練に依拠し、国・地域・言語で分断された従来の書誌



学の限界を克服するべく、すべての研究班・研究グループの参加の下にアジア各地域の紙料情報を系統的に調査収集し、東洋文庫所蔵資料の科学的検討に基づいて相互に比較分析しつつ、古今東西のアジア関連資料の紙質につき東洋文庫から発信する総合的な国際的分析標準を作成し、地域文化の表象である紙をめぐる「知識」の交流史研究に資する点に重点を置いている。  
〔研究実施概要〕

資料のデジタル化公開等による電子図書館の機能を混在させた図書館のハイブリッド化が進む中、資料の現物(書籍・地図・絵画・考古遺物・陶器等)からしか読み取れない情報(紙・墨等の素材や生産された地域・時代等)を分析・研究・蓄積・公開していくことは、アジア・ヨーロッパの様々な時代・地域の資料を所蔵する東洋文庫だからこそ実現可能な研究課題である。

**総合アジア圏域研究**では、「紙質調査チーム」(下記のメンバー表を参照)が中心となって、紙譜(紙の見本帖)、15世紀のインキュナブラやマニユスクリプトをはじめとする古今東西の古典籍、紙関係の辞書・研究書・図録等を収集した。

役割	担当者(所属・職名)
総括・漢文大蔵経諸版の調査	會谷 佳光(研究部主幹研究員)
研究データベース企画立案	相原 佳之(研究部研究員)
研究データベース・システム開発	中村 覚(研究協力者、東京大学史料編纂所助教)
調査全般・技術指導	徐 小潔(研究部研究員)
満洲語文献の調査	多々良圭介(研究部奨励研究員)
漢籍・洋書の調査	段 宇(研究協力者)
資料全般	水口 友紀(研究協力者、図書部保存修復臨時職員)
ちりめん本等の調査	田村 彩子(研究協力者、図書部保存修復臨時職員)
欧米・アジアの比較研究	リンダ・グローブ(研究部研究員)
調査研究顧問	江南 和幸(研究部研究員)
調査研究顧問	石塚 晴通(研究部研究員)

精密顕微鏡 VHX-7000を使用してサンプル調査を実施し、浙江図書館『中国古籍修復紙譜』上・下(国家図書館出版社、2017年)のサンプル紙を調査して、20～1,000倍からなる1万枚弱の紙質データを蓄積し、紙質データベース(画像データは国際規格 IIF(International Image Interoperability Framework)対応)を構築すると同時に、機械認識による紙質データ分析を試みた。これらの成果は、3月13・14日、実践女子大学文芸資料研究所主催のシンポジウム「紙のレンズから見た古典籍—高精細デジタルマイクロスコップの世界—」に共催機関として参加して下記の発表を行い、今後の紙質データベースの構築やデータ分析における協力について意見交換を行った(オンライン開催)。

徐 小潔、會谷佳光「『大清聖祖仁皇帝實録』(康熙帝實録)の紙質—大紅綾本と紫綾本—」

中村 覚「機械は紙を見分けられるのか—紙質観察画像データベースの構築と画像分類における機械学習技術応用の試み—」(共同研究者:徐 小潔、段 宇、多々良圭介)

**現代中国研究**では、政治・外交グループが4月に上海国際戦略問題研究会との間で「コロナ対策と日中関係」と題するワークショップを開催した。経済グループは、毛沢東時代の経済制度と政策に関する学会(中国経済経営学会)で報告を行い(オンライン開催)、多くの学会員と討論を行った。これまで報告・議論してきた論文を『毛沢東時代の経済』と題する書籍にとりまとめ、名古屋大学出版会から出版する準備を行った。国際関係・文化グループは、オンライン会議システムを積極活用して、国内外の研究者と研究成果の共有を進めた。また、若手研究者育成の場としても機能してきた「中国当代史研究ワークショップ」の成果を中国語で出版する準備を進めた(2021年度刊行予定)。

**現代イスラーム研究**では、中東・中央アジアの歴史的に重要な諸法令を翻訳して順次データベース化して WEB 公開する作業の一環として、トルコグループでは粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』(東洋文庫、2007年)所収のオスマン帝国憲法(1876年)およびトルコ共和国憲法(1924年)を改訳するとともに、これらに注釈と解題を付す作業を進めた。その結果、オスマン帝国憲法(1876年)とトルコ共和国憲法(1924年)の改訳を終えた(2021年度前半に公開予定)。イラングループでは、イラン憲法(1906年憲法と1907年憲法補則)の翻訳および注釈を付す作業が完了した(解題を付して2021年度前半に公開予定)。アラブグループでは、エジプト憲法(1923年)の翻訳および注釈を付す作業

を行い、全条の下訳を完成させるとともに、チュニジア憲法(1861年)の翻訳作業に着手した。これらの作業のために、イラングループ・アラブグループではオンラインによる訳文検討会を重ねた。さらに、3月4日にはアラブ・イラン・トルコグループ合同の訳文検討会をオンラインで開催した。「シャリーアと近代:オスマン民法典研究会」(代表:大河原知樹研究員)では、オスマン民法典(メジェッレ)のアラビア語訳の講読・翻訳作成および研究成果公開に向けて9回の研究会を開催した。2月19日にイラングループ主催で研究集会を開催し、鈴木均研究員、黒田卓研究員、阿部尚史研究員、および若手研究者の徳永佳晃氏・中村菜穂氏等が報告を行った(ともにオンライン開催)。

**東アジア研究**では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

**前近代中国研究班**では、中国古代史研究の深化のため、文献史料の精密な理解と新出史料の利用の双方が必要であることから、原則、月2回研究会を開催して、東洋文庫所蔵の豊富な中国地方志資料および東洋文庫のインターネット機能を活用し、文献史料として『水経注疏』巻10漳水篇の精読を進めるとともに、新出史料として『嶽麓書院藏秦簡』所収の律令・律令関係文書の講読と講読方法の検討を進めた。ただし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画よりも進捗に遅れが生じた。また、外国人特別研究員として張鵬飛氏(広東省警察大学院文学部写作研究室主任)を受け入れ、研究会等を通じて学术交流を行ったり、『水経注』に関わる問題について国外の研究者と積極的な意見交換を行い、研究成果の寄贈を受けた(【東ア-1】)。なお、略号については、p.23「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照。以下同)。

「東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、中国東北地方や韓国の遺跡踏査を行うことができず、原三国～三国時代の発掘調査報告書の収集を中心に行った(【東ア-2】)。

前近代中国の社会のうち、表層については豊かな記録が残され、総体として〈秩序〉と〈階層〉を特色とする様相が長期に持続したことが知られている。一方、基層社会は発展と転変、分化を遂げながらも記録の伝存が少数かつ散漫なため、統合的な分析を妨げてきた。そこで、表層と基層両面の接合、交渉の動態に目を向け、根本史料に即して事実を解明し、研究の新生面を開くことを目指した。具体的には、①近年における法制史研究の充実に沿い、地方官の裁判機構、同判決文を手がかりとして、地域、地方社会の紛争解決、利害調整の実態に克明な分析を加える作業を第一の支柱とする。②基層社会側で生活知識、実用知識の手引き「百科知識」として求められた「日用類書」、その項目をなす商人・算数・医薬・道釈・法制、また農業などの著述について、訓読と詳注を①と合わせて推進することにより、表層と基層社会の接合面の総合的、具体的な究明に従事した。明代の「日用類書」『新刻天下四民便覧三台万用正宗』巻21〈商旅門〉のほぼ全体の訳注を終えた。今後は訳文の見直し、関連する東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』との校合・注釈等の整理を行う。また同書巻26〈医学門〉・巻39〈僧道門〉についてそれぞれほぼ二分の一の訳注を終えた。ただし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、2020年9月まで月例研究会が延期となったため未報告部分が残った。光緒2年(1876)刊・釈頭承集・釈儀潤校(道光7年<1827>頃刊の重刻本)『参学知津』および民国初『武林進香録』・『武林進香須知』の路程書・巡礼書については、ほぼ三分の一の訳注を終えた。今後は、月例研究会で報告を行い、データベース公開へ向けた準備作業を進める(【東ア-3】)。

2018年度に刊行した『中国近世法制史料読解ハンドブック』に続き、若手研究者の養成のためのプログラムとして、『演習:中国近世法制史料』(仮)の刊行を目指して、2020年度はその基礎を構築するはずであったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中断を余儀なくされた(【東ア-4】)。

**近代中国研究班**では、20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する資料について中国・香港・台湾等の研究機関と共同研究を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施を見合わせた(【東ア-5】)。

**東北アジア研究班**では、戸籍関係資料と帳簿類など冊子体の各種公私記録類について、日本国内の図書館・資料館等での文献調査を予定していたが、調査先各機関の閉館や利用制限強化等により、ほとんど調査ができずに終わった(【東ア-6】)。東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔」、および「鑲白旗檔」をはじめとする清朝満洲語文書資料に関する研究を継続して実施した。2019年度に学术交流協定を締結した吉林師範大学満学研究所との間で、国際学术交流を展開する予定であったが、新型コロナ

ウイルスの感染拡大により、現地調査を実施できず、基本的な今後の交流に関する打ち合わせをオンラインで実施した（【東ア-7】）。東洋文庫所蔵の文献史料のうち、これまでその書誌学上の特徴等がほとんど未詳であったものを改めて検証し直して公開することで、関係研究分野における若手研究者に裨益できるのではないかと考えから、漢文以外の言語文字を用いて記載された清代文献史料類について、これまで各専門研究領域の分野ごとに区分されて別々に登録されている現状を検証し直し、新たに清代文献史料類として総括し、これまでの登録内容に併記する方式をも含む新たなデジタル化方式で公開するための計画を立て、その整理と分析作業を進めた。また、この作業と並行して、これまでに蒐集した文献史料類のマイクロフィルムについて、その一部をすでに公開したことに鑑み、清代政治・社会経済・民族文化の各専門研究領域をもとに、各地所蔵の文献史料類について新たなデジタル化方式で公開するための計画を立て、その整理と分析作業を進めた。また、清朝祭祀儀礼研究の一環として、石橋崇雄研究員が東洋文庫所蔵の清朝『壇廟祭祀節次』の解読作業を進展させ、その成果の一部を2021年度に和文訳注本として刊行する準備がほぼ完了した（【東ア-8】）。

日本研究班では、2020年度は、仮名草子を中心とした『岩崎文庫貴重書書誌解題X』の公刊に向けた準備作業を進めようとしていたが、新型コロナウイルス感染拡大による制約のため作業が予定通りには運ばなかった。ただ、それら資料の図版掲載のため、2019年度にデジタル撮影した画像について、東洋文庫のデータベース上に公開する準備を進めた。また、東洋文庫ミュージアムと連携して、「岩崎文庫の名品」展覧会の企画立案と、図録『岩崎文庫の名品 叡智と美の輝き』の編集・解題執筆に協力した（【東ア-9】）。

**内陸アジア研究**では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

中央アジア研究班では、ドイツ・トルコ・日本を結ぶオンライン形式で、メンバー制（現在、若手研究者を含め9名）を基本として「突厥碑文研究会」を7回開催した（【内陸-1】）。東洋文庫所蔵の近現代中央ユーラシアの新聞・雑誌資料を同時代の現地語史料として活用するべく、講読研究会をオンライン開催するとともに、新たな新聞・雑誌資料を収集した。研究会で講読した新聞・雑誌の論説・記事の翻訳と訳注を東洋文庫のホームページに掲載するべく準備を進めた。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、対面式の国際交流は実施できなかったが、ウズベキスタンの研究者の協力を得て、同国の国立ナヴァーイー図書館に所蔵される近現代中央ユーラシアの新聞・雑誌資料の詳細な所蔵データを入手することができた。これは今後の国際共同研究に活かしていく予定である（【内陸-2】）。

日本はかつて敦煌・吐魯番文書やその文物の研究で世界をリードしてきたが、今日では衰退傾向にある。この現状を変えて再び世界をリードしていくためには、共同研究を着実に進め、中堅・若手研究者を一人でも多く育て、研究成果を発表していくしかない。東洋文庫はこの分野で多くの文書研究の成果を上げているものの、戦前来、日本国内の諸機関や個人に所蔵されてきた多数の文書類について、その所蔵状況や内容の系統的把握と集約が十分でない点が課題として残っていた。来日した中国側研究者が着手してはいるものの、必ずしも徹底したのではなく、また、本来これは日本側の研究者が責任を持って調査し、データ化をはかる必要があり、これを実現可能なのは東洋文庫を措いて他にないと考える。2020年度は、日本に所在する敦煌・吐魯番関係文書の所在状況の概況を把握した上で、国立国会図書館の文書を、紙質を含めて実地調査する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施できなかった。また、敦煌吐魯番文書の研究に生涯をかけて従事した土肥義和研究員（2020年3月14日逝去）が残された膨大な「土肥義和敦煌吐魯番文書調査資料（通称「土肥ノート」）」の整理に入った（2017年度寄託。ダンボール10箱）。これらは敦煌文書の研究に貴重な手がかりとなる調査ノートであり、2020年度はその全容の把握、整理とデータベース化の方向性を確定する作業を、若手・中堅研究者の協力を得て着手したが、主要なノート5冊を把握したところで終了した。当資料をめぐっては、2021年度からの3か年計画の期間内に、国際敦煌プロジェクト（IDP）に掲載される実文書（写真）との対応関係を明らかにし、実文書（写真）と土肥氏の録文・コメントを並べた形でデータベース化し、東洋文庫で公開する予定である。上記の研究活動の拠点である内陸アジア古文献研究会は、前半こそ新型コロナウイルス感染拡大の影響により実

施できなかったが、11月以降、月1回のペースでオンライン開催した（【内陸-3】）。

チベット研究班では、チベットの歴史、言語、宗教（仏教・ボン教）、社会に関する一次資料の基礎研究として、ウパロセル編纂『大蔵経テンギユル目録』、トゥカン著『西藏仏教宗義』、中央アジア出土チベット語文献、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』について調査・研究した。研究成果として刊行予定のトゥカン著『西藏仏教宗義』第11巻、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』第3巻の編集準備を進めた（【内陸-4】）。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

インド研究班では、前年度に引き続き12世紀～16世紀北インドのヒンドゥー王権の刻文を中心とした史料研究、近世ムガル帝国の史料目録の作成の一環としての公文書の研究、南インド10世紀～16世紀のヒンドゥー王権の公文書（碑文・銅板文書）を中心とした史料研究を行った。次年度以降も視野に入れた形で、新たにインド古代のプラークリット文献の収集を開始した。また、研究員各自の研究分野における近年の研究を中心とした文献目録の作成に取り組んだ。病氣療養中であった小名康之研究員が回復し、オンラインの形ではあるが研究班の活動に復帰した。（【南ア】）。

東南アジア研究班では、研究テーマ「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」を推進するため、原則、月3回の研究会を開催した。年度の前半は、昨年度から講読してきた17世紀の終わりにサファヴィー朝下のペルシアからシャムのアユタヤ朝に赴いたペルシア使節の航海記、*The Ship of Sulaiman* (tr. by John O' Kane, 1972, London) の本文 Part I の後半のインドからシャムに至る部分と、Part II のシャムのアユタヤ朝の首都に到着し、国王やアユタヤ在住のペルシア系住民との接触、国王の象狩りへの招待の箇所を輪読した。マレー半島西岸のテナセリウムからマレー半島を横断し、チャオプラヤー川を遡りアユタヤに至るまでのシャムの状況、またアユタヤ在住のペルシア系住民の王朝におけるプレゼンス、さらに国王の使節への対応を検討した。これを通して、近世東南アジアの港市国家として全盛期にあったアユタヤ朝が、多様な出身地の人々を抱えていたことや、そこでの社会統合のあり方を検討した。

前近代の東南アジア社会を検討するための重要な資料となる、東洋文庫所蔵の故仲田浩三氏収集の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理を進めた。その目録『東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料』を2022年度に出版するための準備を進めた。

東南アジアへの海外出張は見合わせざるを得なかったが、2019年度のインドネシアでの訪問調査により、その存在が判明した1930年代に中部ジャワのスラカルタで建材屋を営んでいた華人の残した帳簿やメモ、ビジネス相手とのやりとりをめぐる Qiep Hong 文書を購入した。当時のインドネシアの社会経済史や日中関係史の資料として貴重であり、2021年度以降カタログ化および内容の分析を進める予定である。今後の分析を通して、この種の資料を基にした国際交流や国際シンポジウム開催の可能性を構想した（【東南】）。

西アジア研究では、新型コロナウイルス感染拡大により、国内外での移動や集会の開催が困難になった。このため、国際集会および資料講読セミナーが2021年度以降に延期となった。ヴェラム文書研究（第二期）について、2019年度にフェス関係の7文書の校訂・研究を進め、*The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries, Part II* (TBRL22) を刊行したことで、未校訂の文書は皮紙文書4点と木片文書46点となる（【西ア】）。

資料研究では、台湾の中央研究院歴史語言研究所との間の資料交換協定（2006年締結）に基づき、同研究所から漢籍電子文献資料庫（データベース、約7億字）の提供を受けた。その対価として、東洋文庫所蔵の貴重洋書・漢籍約10,000コマのデジタルデータを提供した。また、本協定を2021～2023年度まで延長するための合意書を締結した。これにより、同研究所の作成した漢籍文献資料庫の東洋文庫内における授権使用の条件を確保したことになる。このことは、東洋文庫の研究員および閲覧者の研究に寄与すること、きわめて大きいものがある。

各種研究会・講演会の開催状況は、下記のとおりである。コロナ禍の影響により出張を伴う調査・研究会等が相次いで中止となったが、2020年9月以降、Zoom ミーティング等のオンライン会議システム

を導入し、オンライン形式で研究会等を開催した。

月	総回数	総人数	対面		併用			オンラインのみ	
			回数	人数	回数	人数		回数	人数
						対面	オンライン		
2020年4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	6	28	6	28	0	0	0	0	0
7	13	57	13	57	0	0	0	0	0
8	10	48	10	48	0	0	0	0	0
9	15	95	10	50	1	1	2	4	42
10	13	75	11	55	0	0	0	2	20
11	17	164	9	64	4	10	50	4	40
12	17	88	8	55	3	4	13	6	16
2021年1月	8	72	6	45	0	0	0	2	27
2月	9	97	5	38	1	10	2	3	47
3月	15	96	11	61	1	9	2	3	24
総計	123	820	89	501	10	34	69	24	216

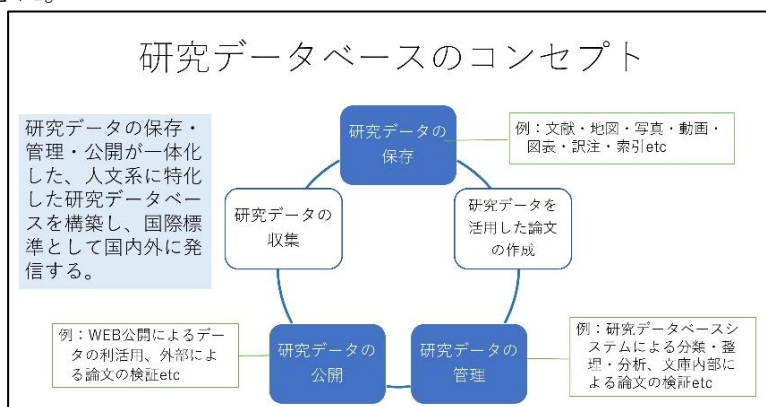
全体として、2020年度前半は、大学等で講義を持つ研究員が慣れないオンライン授業の準備・対応に忙殺され、研究活動が全般的に滞った感は否めない。しかし、後半にはオンラインで研究会や種々の打ち合わせを行うことが常態となり、研究会等への参加がむしろコロナ禍以前より容易になるなど、マイナスの影響ばかりではなかった。また、国内外での資料調査が困難となったため、資料収集やデータベースの構築に予算・人員を投入した。一例を挙げると、紙質調査のための紙譜（紙の見本帖）として、『インキュナブラ零葉集：西ヨーロッパ編』・『インキュナブラ零葉集：ドイツ編』・『古今東亜紙譜』・『古今和紙譜』を購入した。また、総合アジア圏域研究班、現代中国研究班、近代中国研究班をはじめ、研究班・研究員の研究活動への活用のため、「中国海関出版物集成 1850-1949年データベース」(Chinese Maritime Customs Service (CMCS): The Customs' Gazette, 1869-1913)を購入した（東洋文庫内のネットワークに接続したパソコンからのみ利用可能）。

(2) 総合的アジア研究データベースの推進（開発期）

担当：會谷佳光  
相原佳之

全研究班が参画する**総合アジア圏域研究**では、研究部執行部の研究データベース共同研究担当者が中心となって研究データベースの構築をより一層推進するべく取り組んだ。2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で「研究データベース会議」は未開催に終わったが、「(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開」で実施できなかった出張予算をデータベース作成のための謝金に投入することで、当初の想定以上にデータベースの構築を推進することができた。

研究部の取り組む研究データベースは蔵書資料のデジタル化とは異なり、東洋文庫の研究員・研究班の長年にわたる資料調査・研究活動の研究成果（論文、著作、索引、訳注、図表など）およびその副産物として収集・作成された研究データ資源を、保存・管理・公開するためのデータベース・システムであり、研究データベース会議を基盤に、研究データベース共同研究担当者が研究班・研究グループと協力して所蔵資料のデジタル撮影、およびメタデータ等の作成を進めると同時に、研究協力者の中村覚氏（東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター助教）と協同してシステム開発に取り組んだ。



研究データベース全体のタイムスケジュールについては、下図で示したように、2015～2017年度の試行期を経て、2018～2020年度は、第二段階の「開発期」に位置づけ、研究データベース会議を基盤に研究データベースの開発を進め、共通のフォーマットに基づくプラットフォームを持ち、地域横断的かつ通時代的な汎用性の高い横断検索システムを完成させ、システム開発、およびデータ収集・整理に取り組み、2020年度までの公開を目指した。画像データについてはIIIF（International Image Interoperability Framework）を導入し、テキストデータについてはTEI（Text Encoding Initiative）を導入するなど、国際規格に準拠したものとすることで、国立情報学研究所（NII）、アメリカのハーバード・エンチン研究所等、国内外の関係諸機関との連携も視野に入れている。2021年度以降は、第三段階の「発展期」に位置づけ、各研究データベースのデータの拡充、国際規格化に不断に取り組んでいく。



東洋文庫の刊行物のデジタル化公開をより一層推進するため、2018年9月、東洋文庫リポジトリ「ER NEST」を新システム「JAIRO Cloud」に移行して以降、データの充実に努めた結果、登録データ件数は4,649件に達し（2021年3月現在）、2020年4月～2021年3月のダウンロード件数は108,107件を記録した。今後、研究員の研究成果やその副産物を保存管理するための受け皿としても活用していく。

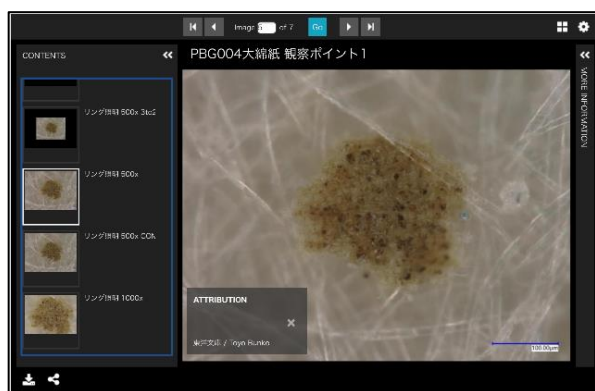
## 2020年度東洋文庫リポジトリ「ERNEST」利用統計

年月	検索	閲覧	ダウンロード
2020年4月	1,346	3,338	8,278
5月	1,690	5,085	7,255
6月	3,397	7,122	9,332
7月	3,456	9,902	14,048
8月	2,318	6,282	7,974
9月	1,368	3,791	6,033
10月	1,784	4,094	11,442
11月	1,367	4,998	9,709
12月	1,759	5,203	7,982
2021年1月	1,341	4,936	7,601
2月	1,232	3,406	6,422
3月	4,459	7,405	12,031
合計	25,517	65,562	108,107

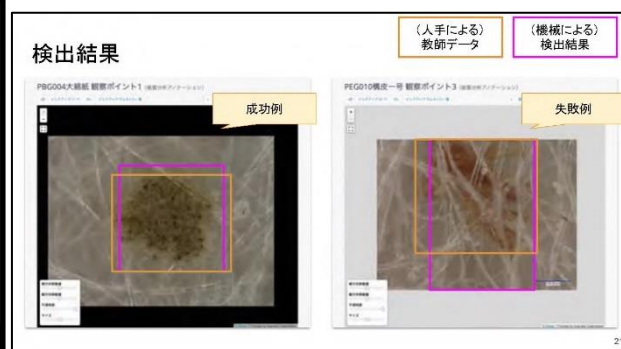
### 〔研究実施概要〕

2020年度は開発期の第3年度として、データ収集により力を入れるとともに、理系研究者中村覚氏（前出）の協力のもと、東洋文庫の연구원・研究班の長年に渡る資料調査・研究活動の成果である研究データ（史資料・写真・地図・パンフレット・論文・解題・索引・研究ノートなど）の保存、管理、公開を一体化したデータベース・システムのプロトタイプ版を開発し、データベース計画のうちデータ収集・整理が一定程度完了したものを登録して試験運用を行った。

文理融合型アジア資料学の主要課題として、紙質調査チーム（p.7参照）主導のもと、サンプル資料として紙譜（紙の見本帖）の紙質データを収集して、紙質判断のため基準データを蓄積して、紙質調査に適した研究データベース・システムの構築を進めた。さらに蓄積した紙質データをもとに、機械学習により紙の作成原料について初歩的な判定ができるシステムの開発を始めた。この開発にも、上記中村覚氏の協力を得ている。



令和2年度に構築した紙質分析データベースの画面



開発中の機械学習システム(中村覚氏レジュメより)

テキストの自然言語処理に有用なツールであるN-gramにつき、同ツールを用いた研究に通じた中塚亮氏（東洋文庫奨励연구원）と打ち合わせを行い、東洋文庫におけるN-gramの利用可能性と今後の協力について話し合った。N-gram導入のため、中塚氏の研究対象である『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』22冊（計1,178コマ）、『新刻全像三宝太監西洋記通俗演義』22冊（計1,340コマ）のデジタル撮影を行った。

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、東洋文庫が所蔵する「日本人の中国旅行記」の文献目録と解題の作成に尽力し、下記の研究成果、および関連する過去の東洋文庫刊行物を東洋文庫リポジトリ「ERNEST」上に公開した。

村田雄二郎・池田尚広・久保 茉莉子・関智英・中村元哉・山口早苗・吉見崇『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』補遺（戦後篇）

<http://doi.org/10.24739/00007426>

東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（東洋文庫、1980年）

<http://doi.org/10.24739/00007427>

**現代イスラーム研究**では、「日本における中東・イスラーム研究文献DB」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、1,200件の新文献を「イスラーム地域研究資料室サイト」に掲載し、データベース文献総件数は59,820件（3月末）となった。年間のアクセス数については、後掲の「2020年度研究データベース・アクセス数」を参照。

**東アジア研究**では、中国古代地域史研究の基礎資料ともいえるべき『水経注』の研究にとり極めて有用な『水経注図』（楊守敬・熊會貞撰、光緒三十一（1905）年宜都楊氏觀海堂刊本朱墨套印、全8冊）のデータベース構築を進めた。『水経注図』には全8冊に分割して地図が収録されているが、これをデジタル撮影し、画像上で繋げて1枚の地図にした上で（2019年度実施）、IIIF画像上に地名・記述とその場所の情報をアノテーションとして付与する作業を進め（計23,100件）、中村覚氏（既出）との協同のもと、地名や記述、図中の区画などから検索できるシステムを開発し（下図を参照）、2021年3月までに全データの登録を終えた。今後、改良の上、2021年度前半に一般公開する予定である（【東ア-1】）。



The image shows a screenshot of the IIIF Curation Viewer interface. The main view is a map titled '水経注図 (水経注図)' with various geographical features and place names. A pop-up information box is visible over the map, displaying details for the location '索水'. The interface includes a search bar, a list of items, and a detailed information panel for the selected item.

地名情報	値
冊	4
区画南北	南5
区画東西	西2
冊	本冊
冊	冊
巻	巻
記号	1
詳細記号	A2

2019年度に引き続き、朝鮮半島における原三国時代～三国時代遺跡のデータベースの作成を進めた。とくに今年度は辰韓・新羅地域の集落および墳墓資料のデータベース化を行った（マイクロソフト社Accessを使用）（【東ア-2】）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、『新刻天下四民便覧三台万用正宗』巻21〈商旅門〉および東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』の語釈1,219項目を整理し、研究データベース公開に向けての補訂作業を継続した。『中国社会経済史用語解』〈法制篇〉の約12,000語にわたる用語解説データのExcel入力、および第一レイヤ～第三レイヤの項目分類をほぼ完了し、研究データベース公開に向けた分類・解説文の補訂等の追加作業を継続した。



また、唐奨基金では、既刊『中国社会経済史用語解』〈財政〉〈経済〉〈社会〉〈公文書〉のデータベース（東洋文庫サーバ内に構築したコピーデータ）を利用して各用語の参考文献・引用文献の追加と解説の修正作業を進め、『増補改訂 中国社会経済史用語解』刊行に向けた準備を行った（【東ア-3】）。

東北アジア研究班では、いままで所属研究員が1980年代以降に実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東等における調査の画像・映像資料等に対して整理・研究を行った（【東ア-7】）。クリスチャン・ダニエルズ研究員が中国雲南省で収集して東洋文庫に寄贈した碑文資料162件について目録整理、碑文の翻字（計46点）を継続するとともに、研究データベース構築（IIIFによる画像公開とアノテーション機能による釈文の付加など）について検討した（【東ア-8】）。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、2020年度に刊行した *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1*の基礎の一つとなったマイクロフィルムデータベースについて、すでに東洋文庫にて Excel を基盤とした専用のシステムを構築済みであるが、カタログの出版によって明確となった IOM のデータを取り入れつつ、今後も整備を継続する予定である（【内陸-1】）。将来のデータベース化に備えて、*Yash Turkistan*（若きトルキスタン）1929～1938年、*Islam Mejellesi*（イスラーム雑誌）1924～1927年、*Asri Muslumanlik*（現代のムスリム）1924～1927年等の雑誌資料と関連資料の CD 化をおこなった（【内陸-2】）。

チベット研究班では、河口慧海将来チベット写本大蔵経について、すでに撮影した「宝積部」全6巻（51～56巻）の画像データを利用した研究データベースを構築するため、10月にライデン大学シルク教授の研究チーム（Open Philosophy <https://openphilology.eu>）、ウィーン大学タウシャール教授の研究グループ（チベット大蔵経プロジェクト <https://www.univie.ac.at/cirdis/research/buddhist-kanjur-collections-in-tibet-s-southern-and-western-borderlands>）と覚書を締結した。これに基づき、国際共同研究を目的とした画像共同利用を開始した。東洋文庫チベット研究班が画像データの調査と宝積部經典の研究資料の調査を行い、ライデン大学の研究グループが宝積部經典の解題、ウィーン大学の研究グループが河口慧海請来写本大蔵経の系統と資料的価値に関する解説を作成した。これらの画像と研究成果は後日一般公開する予定である。また、同様な形式での公開を目指して華嚴部第49～50巻・般若部第35～38巻（計2,006コマ）のデジタル撮影等を行った。

河口慧海将来チベット語蔵外文献写本の解読作業を進め、チベット語活字体テキストとして入力し、研究データベースの作成を行い、そのうち2点を Tibetan E-Texts として東洋文庫リポジトリ「ERNEST」に公開した（下記）（【内陸-4】）。

蔵外373 : <http://doi.org/10.24739/00007424>

蔵外443 : <http://doi.org/10.24739/00007425>

インド・東南アジア研究のうち東南アジア研究班では、*The Ship of Sulaiman*, (tr. by John O' Kane, 1972, London)の Part I と II のうち輪読した箇所本文内容について、日付・トピック・概要・関連情報の諸点にまとめた(Excel で作成、件数128)（【東南】）。

西アジア研究では、西アジア研究班収集のアラビア語木片文書46点（第一期29点、第二期17点）につき、平面（2D）撮影（第二期17点）および試行的な立体（3D）撮影（第一期5点、第二期6点）を行った。将来的に校訂作業結果とともに研究データベースとしての公開も視野に入れている（【西ア】）。



アラビア語木片文書の一つ

上記の各種データベースの登載と運用に必要なIIIF対応の画像サーバ、静的ファイルサーバ、アプリケーションサーバにつき、購入およびレンタルの方式で導入した。2021年度前半に公開し、蔵書データベース・TB OPAC・リポジトリと連動させつつ運用していく予定である。

資料研究では、現地調査によって得られた写真・録画・文献資料の電子データ化、およびデータベース化とその公開を実施した。

(一) 写真

梅原考古資料26,000件につき、年次計画に従って、電子化・公開を実施してきているが、2020年度は、2018年度の縄文時代、2019年度の弥生時代に引き続き、銅鐸資料3,950件をデータベースに構成し、電子化して2021年1月に公開した（山村義照研究員担当、登録制）。公開後、アクセス数が急上昇しており（次頁「2020年度研究データベース・アクセス数」を参照）、考古学分野の研究に対する貢献の大きさが確認できる。

<http://124.33.215.236/umeharadotakuopen/umejpdotakuqueryinput.php?tenkai=1>

【伝承推定】	伝承
【地域 府県等】	鳥取県
【銅鐸等通称】	(伝) 伯耆国出土銅鐸
【出土地・銅鐸等通称 補遺】	(旧) 伯耆国
【所蔵機関】	辰馬考古資料館
【所蔵者等】	辰馬悦藏
【関係機関・関係者等】	山川七左衛門
【関係機関・関係者等 補遺】	山川氏 旧蔵
【銅鐸等】	横帯文銅鐸
【出土品 補遺】	原始絵画有
【記録資料形態】	写真
【記録資料内容】	文様模式
【記録資料 補遺】	a.正面B面 身上部・原始絵画(水鳥) b.側面B   A面・側面A   B面
【管理番号(分類記架番号)】	NY-1166 3843a・3843b
【特記】	梅原氏「銅鐸の研究」図版(図録箱)第133

(二) 動画

1) 「中国祭祀演劇資料」の「海陸豊劇」として、「大会諸侯」「三戦呂布」52分を公開した（田仲一成研究員）。

[http://124.33.215.236/movie/VII\\_taikaisyoko/taikaisyoko.html](http://124.33.215.236/movie/VII_taikaisyoko/taikaisyoko.html)

<http://124.33.215.236/movie/saneiseinryofuB/saneiseinryofuB.html>

2) 「中国浙江省木偶戯資料」として、「娘娘傳」51分、「薛丁山与樊梨花 三擒三放」58分を公開した（馬場英子研究員）。

<http://124.33.215.236/movie/baba/20200709/chinjushi.html>

<http://124.33.215.236/movie/baba/20200912/fanlihua.html>

いずれもアクセス数が上昇しており、中国演劇史研究への貢献を確認できる。

最後に、2020年度までに公開済みの研究データベース・アクセス数を次頁に挙げておく。

2020年度研究データベース・アクセス数

データベース名	2020年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2021年1月	2月	3月	計
中國經濟史用語DB	11,302	11,689	12,323	12,987	11,738	12,586	13,011	12,604	14,230	18,777	17,779	19,687	168,713
宋会要輯稿食貨編社 会經濟用語DB	16,760	17,329	17,785	18,662	17,859	19,141	19,797	19,194	32,848	33,662	31,580	34,981	279,598
梅原郁編『唐宋編年 語彙索引』DB	5,422	5,613	5,534	5,847	5,291	5,671	5,861	5,675	5,968	6,466	5,824	6,451	69,623
新版唐代墓誌所在總 合目録（増補版） DB	2,097	2,178	2,110	2,195	1,990	2,134	2,207	2,139	2,411	2,525	2,270	2,513	26,769
日本における中東・ イスラーム研究文献 DB	※2020年4月～2021年3月の期間統計												
梅原考古資料 日本繩文時代之部	42,889	45,346	45,958	48,932	44,204	49,963	51,672	50,106	52,787	54,809	50,493	55,907	593,066
同 弥生時代之部	37,412	38,702	38,459	40,954	36,992	41,959	55,397	53,691	55,901	55,903	53,383	59,135	567,888
同 銅鐸之部										99,295	114,378	136,714	350,387

### (3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進

担当：會谷佳光  
相原佳之

上記(1)(2)の諸活動によって得られた最新の研究成果を、国際シンポジウム・ワークショップを開催して、広く国際的に発信することで、世界のアジア研究の進展に大きく貢献すべく取り組んだ。その一方で、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進することで、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実に取り組んだ。

国際シンポジウムの運営全般、および総合アジア圏域研究班の諸活動に携わって研究活動を補助する人材、および欧文による成果発信を強化するための人材を確保・育成すべく取り組んだ。

[研究実施概要]

**総合アジア圏域研究**では、2020年度、中央アジア研究班「非漢字諸語出土古文献の研究」・「日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究」両グループのコーディネートによって「内陸アジア古文書研究アーカイブの役割：敦煌・トルファン出土古文献をめぐる」をテーマに国際シンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により2023年度に延期することとなった。

**現代中国研究**の国際関係・文化グループでは、11月28日、華東師範大学との協同で、1950～80年代中国を対象とする第9回日中共同研究「中国当代史研究ワークショップ」を主催し、若手研究者に対して報告と交流の場を提供した(<http://www.tbcas.jp/ja/20201128WS.pdf>)。12月14日に中央研究院近代史研究所の黄克武氏の参加を得て、氏の最新の研究成果『顧孟餘的清高』と東洋文庫が所蔵する史資料との関係性を検討し、東洋文庫が海外の中国史研究・日中関係史研究に与え得る意味を再考した(ともにオンライン開催)。



第9回中国当代史研究ワークショップの様子

**東アジア研究**のうち前近代中国研究班では、「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループが、『増補改訂 中国社会経済史用語解』(唐奨基金)の公刊される時期(2023年度)の前後を目処に、国際シンポジウムの開催を検討している。過去・現在の中国に対して強い関心が集まり、国際的に中国研究者が増大する趨勢のなか、中国史・中国史料そのものへのアクセスは容易でないとされている。その一つの理由は、中国語への習熟の困難と、中国史では史的かつ制度的枠組みが複雑で独自であることが指摘されている。欧米では早くからシナ学の伝統を築いたためか、中国史やその史料学に対する理解や教育法の工夫も進んでいる。将来、中国本土、台湾、欧米の専門家を招き、日本で行われているような訓読法をベースにした読解力や中国学の促進に資する若手研究者の訓練法をめぐる意見の交換がなされることを期待するが、本研究グループの「用語解」をめぐる努力も、そうした試みにおいて有力な話題を提供できると考えている(【東ア-3】)。

**近代中国研究班**では、2019年度に開催を延期したシンポジウム「戦前日本の華中・華南調査」について、新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンライン開催とし、若手研究者の積極的な参加を含め、200人以上の参加を得た(【東ア-5】)。

**内陸アジア研究**のうちチベット研究班では、2020年9月にチベット大蔵経とその研究史をテーマに国際ワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2021年度に延期となった(【内陸-4】)。

### (4) 研究成果の刊行・発信の強化

担当：中村威也  
小澤一郎

資料調査・研究の検討過程や研究成果、および国際シンポジウム・ワークショップの内容を紙媒体・電子媒体によって発信する。特に国際シンポジウムはその速報性を重視して、開催年度にオンラインジャーナル *Modern Asian Studies Review* / 新たなアジア研究に向けて(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp>)

[/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1052](#))で概要を発信し、翌年度以降に紙媒体で報告論文集を刊行する。また、従来の和文・欧文による発信を一層推進するとともに、新たに中国語による発信を加えることで、多言語による研究成果の国際発信力を強化し、資料交流・人的交流・国際交流に資すべく取り組んだ。

また、出版物の質的向上をはかるため、東洋学の知識と編集校閲技能を兼ね備えた人材を確保・育成し、かつ日本語論文を英訳するネイティブ・スピーカーの協力を得た。

これらの出版物ならびに電子ジャーナルは、日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するものとなる。

〔研究実施概要〕

**東アジア研究**のうち**近代中国研究班**では、研究テーマ「20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究」に係わる研究成果を東洋文庫和文論叢83『戦前日本の華中・華南調査』として刊行した。また、研究成果発表の場として『近代中国研究彙報』第43号を刊行した。その中で日中関係に関わる60年前のインタビュー記録について、若手研究者中心のメンバーによって活字化して掲載した（矢野真太郎「荒木貞夫の口述記録—満洲事変について—」）（【東ア-5】）。

**東北アジア研究班**では、資料研究データベースの構築の一環として、1980年代以降にグループ構成員が実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東をはじめとする調査の画像・映像資料等に対する整理・研究を行い、細谷良夫『清朝の史跡をめぐって I 清朝全土篇』を刊行した。本書は、30年以上にわたる中国国内の清朝史跡の調査記録であり、今は埋滅してしまった遺跡や文化財も含まれていて、貴重なデータを収録している（【東ア-7】）。

**内陸アジア研究**のうち**中央アジア研究班**では、東洋文庫が所有するロシア・サンクトペテルブルクのIOM (Institute of Oriental Manuscripts) 所蔵ウイグル古文献カタログとして、*Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1*. Edited by IOM, RAS & The Toyo Bunko. (Chief Editor: Peter Zieme, Compilers: Olga Lundysheva, Anna Turanskaya, Hiroshi Umemura) の編集・出版を行った。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、IOMを訪問できない状況のもとメールで連絡を取り合って編集を進め、ウイグル古文献の研究史および今回の編集にかかわる日本の貢献について情報を提供した。なお、東洋文庫独自で進めてきたマイクロフィルムによるテキスト同定作業が今回のカタログ編集作業の基礎データの一つとなっている（【内陸-1】）。

**インド・東南アジア研究**のうち**東南アジア研究班**では、「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」の研究活動とも関連する、奴隷の社会統合に果たす役割を東南アジアも含めて総合的に考察し、HIROSUE Masashi, “Introduction: The Comparative Study of Mediterranean and Non-Mediterranean Slavery and Bondage from Historical Perspectives”, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.78, (2020), pp.1-3にまとめた（【東南】）。

## (5) 若手研究者の育成

担当: 會谷佳光  
相原佳之

東洋文庫では、若手研究者の育成にあたり、常に公益性を重視して、東洋文庫の内部にとどまらず、東洋学の伝統を継承・発展させていくことで、将来にわたって世界の研究者を裨益し、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く一般の方々に還元することを目指している。そこで、下記の若手研究者の育成にかかわる取り組みを通して、若手研究者が自発的な研究活動等を行えるよう支援した。

〈科学研究費の応募資格を持たない者に対する支援〉

東洋文庫で研究補助等の業務に従事する若手研究者のうち科学研究費の応募資格を持たない者が、日本学術振興会の科学研究費助成事業(科学研究費補助金)「奨励研究」に申請して教育的・社会的意義を有する研究に取り組む場合、所属機関として「奨励研究」にかかわる諸手続・管理を承諾

することで、その研究を積極的に支援する。

〈東洋文庫奨励研究員の任用〉

博士後期課程修了者については、公募・内部推薦を併用してポストドクターを選抜して「東洋文庫奨励研究員」に任用して科学研究費の応募資格を与え、東洋文庫研究員に準ずる者として『東洋文庫年報』の「役職員名簿」にも掲載し、東洋文庫の資料を広範に利用できるようにするなど待遇面の向上を行うと同時に、研究班・研究グループのメンバーとして資料研究・アジア現地資料調査・国際会議に参加するなど実践的な研究指導を行うことで、研究者としての早期の自立を促すなど、若手研究者の育成・雇用促進を進める。

〈インターンシップ活動等の実施〉

研究者育成のためのインターンシップ活動として、ハーバード・エンチン研究所の研修プログラムへの参加や、若手研究発信支援プログラムによる英語論文の作成指導などを実施する。

〈東洋文庫諸事業への参画による実務経験の蓄積〉

奨励研究員経験者を、国際共同研究や国際シンポジウムなど東洋文庫の各種の公開学術活動に積極的に登用し、アジア各地における日本人研究者雇用のニーズに応える。並行して、若手研究者の参加に基づき東洋文庫の研究図書館としての機能を継承発展させる一方、『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』等の学術誌の編集、資料収集・整理、および研究データベースの開発・発信等において、研究支援者として雇用して実務経験を積ませるなど、若手研究者の育成および雇用促進のための体制を一層充実させ、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施をはかる。

〈若手研究者の雇用と任期中および任期満了後の支援〉

奨励研究員等若手研究者のためのポストとして「嘱託研究員」を設定し、各部署の諸事業に参画しつつ、かつ東洋文庫の所蔵資料を活用して研究を行うことを支援している。2019年度には新たに「嘱託研究員規約」を施行し、嘱託研究員は所属長の許可を得た上で、本来の業務に影響を生じない範囲内で、個人または文庫の研究班・研究グループの調査研究活動等、研究者としてのキャリアアップのために必要な諸活動を行うことができ、かつ文庫から科研費に申請する資格を与え(ただし文庫等での勤務時間外にみずから主体的な研究を行うだけの十分なエフォートを確保できる場合に限る)、嘱託研究員の任期満了後も東洋文庫の専任研究員として在籍し、文庫の諸施設を利用可能とすること等を定めた。

上記の東洋文庫における若手研究者育成事業についてホームページ上で広く周知する準備を進めた。

〔研究実施概要〕

**総合アジア圏域研究**では、若手研究者育成の一環として、精密顕微鏡による紙質調査において、奨励研究員の多々良圭介氏・研究協力者の段宇氏の協力を得た。

**現代中国研究**の国際関係・文化グループでは、8月24日、研究協力者として研究活動に参画している若手研究者、久保茉莉子氏の『中国の近代的刑事裁判』(東京大学出版会、2020年)、吉見崇氏の『中国司法の政治史1928-1949』(東京大学出版会、2020年)に対する合評会を開催し、中央大学法学部准教授の山口亮介氏、広島大学大学院文学研究科教授の金子肇氏より、それぞれの専門分野からのコメントを得て、若手研究者の育成に取り組んだ。11月28日、華東師範大学との協同で開催した第9回日中共同研究「中国当代史研究ワークショップ」において、若手研究者に対して報告と交流の場を提供した(ともにオンライン開催)。

**現代イスラーム研究**では、中東・中央アジアの歴史的法令の翻訳作業に複数の若手研究者が研究協力者として参加し、中心的な役割を果たした。

**東アジア研究**のうち前近代中国研究班「中国古代地域史研究」グループの研究会では、若手研究者が参加者の過半を占める。研究員のほか、外国人研究者も加わる形で共同作業として読解、研究を進めることで、若手研究者の研究遂行能力・執筆能力の向上を図った(【東ア-1】)。現地資料調査(2019年度の韓国現地資料調査に同行)およびデータベース作成において、専修大学大学院博士課程在籍の韓国人留学生1名および修士課程の大学院生1名が研究協力者としてこれまで参加してきた。前者は2021年度に博士学位論文を提出する予定であり、後者は2020年度に修士課程を修了し、川崎市教育委員会の文化財専門職に就職した(【東ア-2】)。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループの研究を推進しているのは「訳註」の作業であり、正確な和文への翻訳および詳しい註釈を語彙・術語に施すことに注力している。東洋文庫では開設以来(1924～)『歴代正史食貨志訳註』の事業を継続させ、10種の「正史食貨志」本文の訓読と注釈を蓄積し、東洋文庫刊行物の核心をなす「論叢シリーズ」として2009年までに『宋史食貨志訳註』(一)～(六)・索引計7冊(総頁数3,997頁)を公刊してきた。この永年培ってきた実績・経験、なかんずく訳註のスキルは、扱う時代・主題は異なっても、新進気鋭の若手研究者にとって、資料の操作、読解の力量を増進するために有益である。本研究では訳註を主とする月例研究会を営むが、その班員の半数は老練な専門研究者であり、約半数はMC・DC研究者、またPDから現任の大学教員であって、彼らが研究成果を報告するという、一種の「上級セミナー」の形をとっている。若手研究者の担当した報告は、下記の通り。

2020年4月に上智大学准教授として着任した班員の大川裕子「水辺の暮らしをささえた植物—長江下流低湿地水生植物考—」(10月27日)は、農書・本草書・地方志等の史料分析から、長江下流低湿地水生植物は唐代以降に栽培化が進み、宋元時代には商品として栽培が普及し、明代には商業的農業の進展にともない集約的栽培が行われたことを明らかにし、『東洋史研究』79巻4号(2021年3月)に論考を掲載した。白山友里恵(上智大学大学院修士課程在学)『「諸病源候論」における虫表象傷寒類(修士論文)」(11月24日)は、隋代に編纂された、魏晉南北朝期医学の集積ともいえる医学書『諸病源候論』を主要史料とし、病における虫の検討を試みた。原瑠美(学習院大学PD共同研究員)「南宋末西湖の「公共性」についての一考察」(2月26日)は、南宋末の文献や地図をもとに軍営や園林の分布、湖岸の占有状況、人々の行楽ルートを整理して、西湖の「公共性」について考察を行った。いずれも班員と議論を重ね、今後の研究課題を探った(【東ア-3】)。

研究班メンバー各自が培ってきた知識や技術を若い研究者や学生に伝え、この研究分野に関心を持つ層の裾野を広げ、ひいては専門研究者を育成するため、各自が研究に活用できると判断した中国近世の法制関係の個別史料を紹介し、それを精読・分析する形式の報告会を頻繁に開催し、その蓄積をもとに入門書『演習:中国近世法制史料』(仮)の刊行を目指したが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中断を余儀なくされた。この活動を2021年度に継続していくため、報告会のオンライン開催に向けた準備を進めた(【東ア-4】)。

東北アジア研究班では、2019年度に続き、若手研究者の育成を目的に満洲語研究講座を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止を余儀なくされた(【東ア-8】)。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班の近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会では、とくに若手研究者が試訳の作成を担当し、これを全員で検討する形で読解力を高め合った(【内陸-2】)。チベット研究班では、資料研究に若手研究者を参加させ、指導しながら共同研究を行っている。河口慧海将来チベット写本大蔵経の研究データベースの作成において、画像データの調査に若手研究者の協力を得た(【内陸-4】)。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、各研究員は様々な共同研究・学会発表等を通じて若手研究者や海外を含む多くの研究者と交流し、新しい研究動向の把握に努めた(【南ア】)。東南アジア研究班では、若手研究者の研究会への参加を積極的に促すとともに、彼らの研究テーマについて7月・11月の研究会で報告してもらおう機会を設けた(【東南】)。

2020年度は、若手研究者育成の一環として下記の者を採用した。

(嘱託研究員)

・小澤 一郎

研究課題「近現代西アジア軍事社会史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

・中村 威也

研究課題「中国古代地域社会、非漢族研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及すべく取り組んだ。

〈奨励研究員〉

- ・中塚 亮  
研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。
- ・多々良圭介  
研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。

なお、2020年度の若手研究者育成の実績として、大学等研究機関の研究職に採用された方について挙げておく。

- ・小澤一郎  
2016～2020年度に嘱託研究員として、欧文による成果発信に従事した。2021年4月に立命館大学文学部准教授に就任。
- ・濱本真実  
2014～2016年度に日本学術振興会特別研究員 RPD として受け入れた後、東洋文庫研究員に就任した。2021年4月に大阪市立大学文学部准教授に就任。
- ・井上弘樹  
2016年10月～2018年3月の間、和文編集の臨時職員として『東洋学報』等への編集実務に携わった。2021年4月に東京医科大学医学部講師に就任。
- ・三浦雄城  
2019年12月～2021年3月の間、和文編集の臨時職員として『東洋学報』等への編集実務に携わった。2021年4月に東京大学東洋史学研究室助教（任期付）に就任。
- ・西川和孝  
2017年度よりクリスチャン・ダニエルズ氏寄贈雲南拓本資料のデータ整理・釈文作成作業に従事している。2021年4月に明治大学法学部専任講師（中国語）に就任。



アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ

部門	研究班	アジア基礎資料研究テーマ	略号	
超域アジア	総合アジア	アジア資料学の深化—保存・研究・普及のための文理融合型 アジア資料学の展開と研究データベースの構築	—	
	現代中国	現代中国の総合的研究(4)	—	
	現代イスラーム	近現代イスラーム地域の構造変動	—	
歴史 文化 研究	東アジア	前近代中国	中国古代地域史研究	東ア-1
			東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究	東ア-2
			中国社会経済・基層社会用語のデータベース化	東ア-3
			宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明	東ア-4
	近代中国	20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究	東ア-5	
	東北アジア	近世の朝鮮で作製された各種記録類についての基礎的・総合的 研究	清代満洲語文書資料及び画像資料等のデータベース化に関する 研究	東ア-7
			清代中国諸地域の構造分析:政治・社会経済・民族文化の史的 展開	東ア-8
			日本	岩崎文庫貴重書の書誌的研究(4)
	内陸アジア	中央アジア	非漢字諸語出土古文献の研究	内陸-1
			近現代中央ユーラシアにおける出版メディアと政治・社会運動	内陸-2
			日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究	内陸-3
		チベット	チベット語資料の活用とチベット文化の複合的研究	内陸-4
	インド・ 東南アジ ア	インド	インド中世・近世における文書史料研究	南ア
東南アジア		近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究	東南	
西アジア	西アジア	文書資料による比較制度研究	西ア	
資料	東アジア資料	東アジア現地資料の研究	—	

アジア資料調査地域分担一覧



## II. 資料収集・整理

アジア基礎資料研究に取り組む各研究班と協力して、アジアの現状および歴史・文化に関する一次資料(写本、文書史料、刊本、地図、統計、調査記録等)、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の充実に努めた。

収集した資料を速やかに整理して電子情報化することで、アジア学資料センターとしての機能強化を推進した。東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化をさらに推進し、オンライン検索サービスにより広く一般の利用に供するため、様々な言語に通じた司書・研究者・大学院生による書誌データの加工作業を継続した。

2015～2019年度に続き、東洋文庫の所蔵資料のうち、和書・漢籍・洋書古典・近代初期洋書、絵画、考古資料等に対する悉皆調査を行い、専門家による和漢洋古典籍の保存修復を実施するとともに、書誌学・資料学の専門家の協力のもと調査・分析ならびに記録を行い、デジタル・アーカイブに加工し、広範な利用目的に対応すべく継続的作業を行った。

以上の活動を推進するため、書誌学に通暁した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組んだ。

### A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区 分	和漢書	洋 書	その他
総合アジア圏域研究	2 冊	7 冊	0 件
超域・現代中国研究	204 冊	0 冊	0 件
超域・現代イスラーム研究	0 冊	363 冊	0 件
東アジア研究	36 冊	10 冊	0 件
内陸アジア研究	25 冊	33 冊	0 件
インド・東南アジア研究	2 冊	3 冊	0 件
西アジア研究	0 冊	257 冊	0 件
共通(継続・大型資料)	685 冊	288 冊	0 件
合 計	954 冊	961 冊	0 件

### B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈					寄 贈		
	和漢書	洋 書	アジア諸語	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	462 冊	26 冊	1 冊	14 件	489 冊 14 件	669 冊	301 冊	970 冊
定期刊行物	672 冊	114 冊	6 冊	0 件	792 冊	4,377 冊	590 冊	4,967 冊
計	1,134 冊	140 冊	7 冊	0 件	1,281 冊 14 件	5,046 冊	891 冊	5,937 冊

### C. 資料保存整理

2020年4月1日～2021年3月31日までの期間における、保存整理作業は、下記の通りである。

保存整理作業として、保存環境の整備、虫菌害の対策に努めるとともに、破損資料の修理・修復、洋書革装本の保全処置、保存容器の作製などを行った。本年度は、昨年度に引き続き、ミュージアムでの展示資料を初めとする和・漢・洋古典籍(モリソン文庫・岩崎文庫ほか)を中心に作業を行った。

その他、新たに受託した貴重洋書群コルディエ文庫約5,500冊の受入れに際し、4次にわたる炭酸ガス包み込み燻蒸ならびに燻蒸後の資料のクリーニング作業を行った。当該資料群は、フランスの東洋学者アンリ・コルディエ (Henri Cordier 1849～1925) 旧蔵の東洋学関係の研究書を中心とする洋書からなり、革装本を含む近代の洋装本がほとんどである。膠や皮革などの動物性タンパク質が多く用いられている背表紙を中心に無数の穿孔被害がみられ、砂状の虫糞などがクリーニング後の資料からもこぼれ落ちるなど、書庫への排架が困難な資料も見受けられ、今後も継続して作業が必要である。

以上に関しては、若手人材育成プロジェクトの一環として、保存修復の専門家による指導のもと実践的な保存整理作業を行った。

・逐次刊行物合冊製本(外注)	574点
・修理・修復(破損による再製本を含む)	
洋書	82点
和漢書	260点
・簡易補修	44点
・革装本の保全処置(HPC塗布など)	97点
・保存容器(外注含む)	280点
・状態点検・調査のみ(処置なし)	363点
・寄託資料:永青文庫所蔵コルディエ文庫クリーニング作業	約5,000冊
・マイクロフィルム劣化防止作業	なし



昭和女子大学のインターン受入による洋古書修復体験の様子

### Ⅲ. 資料研究成果発信

#### A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第102巻第1-4号 A5判 4冊(刊行済)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1346](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1346)
2. 『東洋文庫欧文紀要』 No.78 B5判 1冊(刊行済)  
(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1352](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1352)
3. 『近代中国研究彙報』 第43号 A5判 1冊(刊行済)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1353](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1353)
4. 『東洋文庫書報』 第52号 A5判 1冊(刊行済)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1354](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1354)
5. *Modern Asian Studies Review* Vol.12 オンラインジャーナル(公開)  
／新たなアジア研究に向けて  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1355](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1355)
6. *Asian Research Trends New Series* No.15 A5判 1冊(刊行済)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1356](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1356)

#### B. 論叢等出版

1. 『戦前日本の華中・華南調査』(東洋文庫論叢 83) A5判 1冊(刊行済)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1358](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1358)
2. 『清朝の史跡をめぐってI—清朝全土篇—』 A4判 1冊(刊行済)  
▶ <http://doi.org/10.24739/00007423>
3. IOM, RAS & The Toyo Bunko eds., *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1* A4判 1冊(刊行済)  
▶[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1359](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1359)

※▶は、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」の掲載アドレス(一部は公開準備中)。

## IV. 普及活動

アジア基礎資料研究の成果を一般向けに分かりやすく解説するため、東洋文庫研究員等による東洋学講座を前後2期、計6回開催することを計画していた。また、各研究班のコーディネートによって、招聘研究者および来日中の著名な外国人研究者による特別講演会を開催する予定であった。これらは新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施できずに終わった。その一方、学芸員を雇用して、東洋文庫の蔵書資料や研究成果をわかりやすく展示解説し、一般に広く普及すべく取り組んだ。

### A. 研究情報普及

#### 1. 東洋学講座

近年の研究成果を一般に向けて広く普及するため、前期に東南アジア研究班、後期に日本研究班が東洋学講座を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により次年度に延期となった。

#### 2. 東洋文庫公開講座・公開研究会

東洋文庫の所蔵資料や研究活動・研究成果をテーマとして、国内外の当該分野の著名研究者を招いて公開講座・公開研究会を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により延期または中止となった。

#### 3. 特別講演会

東洋文庫研究員、研究班の主催によって、主として来日中の著名な外国人研究者を招いて特別講演会を実施する予定であったが、その多くが新型コロナウイルス感染拡大の影響により延期または中止となった。

#### 4. 東洋文庫談話会（東洋文庫研究会）

専門分野の若手研究者による成果報告会として、2020年度は3月の開催を検討していたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、開催を延期した。

#### 5. ミュージアムによる公開講座・イベント

東洋学の一般への普及を目的に、企画展に合わせて、以下のミュージアムによる公開講座・イベントを、感染症対策に留意したオンラインの形式で開催した（以下、項目別に開催日順で記載）。

#### 【講演会（オンライン配信）】

（「大宇宙展一星と人の歴史」 会期：2020年6月24日～9月22日）

9月2日（水）～9月30日（水）（動画配信期間）

「曆に託された古代帝王の秩序観」

東洋文庫研究員  
東京大学名誉教授 平勢 隆郎氏

「江戸の天文学—明治近代化へのさきがけ」

大東文化大学東洋研究所兼任研究員 中村 士氏  
以上

【イベント（オンライン配信）】

11月21日（土）

「未来につながるコレクション—日米ふたりのコレクターの哲学を辿って」

国立アジア美術館日本美術学芸員

フランク・フェルテンズ氏

東洋文庫研究員・学芸員 岡崎 礼奈氏

※国立アジア美術館（フリーア美術館、アーサー・M・サックラー・ギャラリー）と  
共催

以上

6. 研究情報の普及

研究情報を普及するため、機関リポジトリ「ERNEST」(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>)。利用統計は「Iアジア基礎資料研究」p.13に既出)、TB OPACシステム (<http://tbopac.toyo-bunko.or.jp/>)。利用統計は下記のとおり) を管理・運営した。

2020度TB OPAC利用統計

年月	訪問者数	1日平均	検査数	1日平均
2020年4月	583	20	16,359	546
5月	507	17	16,136	521
6月	547	19	22,375	746
7月	503	17	24,849	829
8月	507	17	25,721	858
9月	501	17	15,232	508
10月	517	17	26,259	876
11月	512	18	20,858	696
12月	523	17	18,486	617
2021年1月	550	18	18,037	602
2月	499	17	19,853	710
3月	560	19	19,854	641
合計	6,309	213	244,019	8,150

※30分以内に同一IPから訪問があった場合は1名としてカウントされる。

7. 参考情報提供

調査研究による研究成果をはじめ東洋文庫の活動全般に関する年次報告書として、下記の刊行を行った。

『東洋文庫年報』2019年度版

A5判 1冊（刊行済）

[https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1361](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1361)

## B. データベース公開

東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化は、総冊数約100万冊の遡及入力を進めており、2020年度は、引き続き和書分類データベースなどの書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図などの画像データのデジタル化を進めると同時に、梅原考古資料の未公開部分（縄文時代・弥生時代）につきデジタル化・データベース化を推進することで、本格的な東洋学多言語貴重資料のマルチメディア電子図書館の構築に取り組んだ。

従来より整備・公開している書誌・画像・動画データベースについては、もっぱら公共へのサービスに重点を置き、アクセス数の掌握・分析を行ってきたが、今後は、実際にどの程度、研究者に利用されているかを掌握するため、下記の体制を構築した。

一. データの一部について登録制を導入した。

従来、不特定多数への公開に問題があって一般公開に至っていないデータがあり、これについて、登録制を導入してサンプルデータをウェブサイト上で公開する作業を進めた。登録者には、利用した著作物について、その著作物の書誌事項・利用個所の報告を義務付け、その利用状況を把握するべく取り組んだ。なお、データ全篇の利用を希望する者は、東洋文庫閲覧室の専用端末で利用することとした。2020年度は、東アジア資料研究班と共同して、下記の公開を行った。

・梅原考古資料日本銅鐸之部 分類データベース：3,950件

梅原考古資料朝鮮之部については、従来より簡易分類を付したモノクロ画像のデータベースを公開している。2018～2019年度、利用頻度の高い日本の縄文時代および弥生時代の文物について、出土地域や遺物の形態、所蔵機関等を詳細に分類し、カラーの高精細画像を公開したの続き、2020年度は銅鐸之部3,950件を公開した。

<http://124.33.215.236/umeharadotakuopen/umeipdotakuqueryinput.php?tenkai=1>

二. 利用者に対し、データベースのコンテンツを著作物に引用した場合に、その旨を著作物に明記すること、本文庫に対するその旨の通知および当該著作物の1部献呈などを要望した。この旨を明記した文言を、データベースの大項目の冒頭に掲げた。また引用個所が明示できるよう、表示した頁に記号・番号を付与すべく取り組んだ。

上記の体制を構築するため、データベース技術指導者・補助作業者を雇用して作業を進めた。

2020年4月1日～2021年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語・英語）に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料「公益財団法人東洋文庫データベース利用状況調査」の通りである。

また、新たに受託した貴重洋書群コルディエ文庫について、冊子体目録（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『コルディエ文庫分類目録』斯道文庫、1979年刊）から書誌データベースへの遡及入力作業を実施し、1,935件の登録を完了した。燻蒸・クリーニング処置等を終えた資料との現物照合作業を2021年度に進める予定。

## C. 海外交流

フランス国立極東学院および中央研究院の歴史言語研究所・近代史研究所（台湾）、ハーバード・エンチン研究所（アメリカ）、アレキサンドリア図書館（エジプト）、イラン議会図書館、University of London, School of Oriental and African Studies (SOAS)（イギリス）、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所（ドイツ）、国際テュルク・アカデミー（カザフスタン）、吉林師範大学満学研究院（中国）との学術交流を進め、資料・情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材育成を共同で行う取り組みを開始しており、それらを一層推進した。

世界各地からアジア基礎資料研究に取り組む外国人研究者を招聘して、総合アジア圏域研

究国際シンポジウム等を通じた国際学術交流を推進する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により未実施に終わった。



## V. 学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学にかかわる共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

### A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

広く一般に開放された無料の閲覧室の運営を行った。

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
書庫利用者人数	0人	0人	0人	17人	25人	30人
閲覧者人数	0人	0人	0人	6人	76人	54人
閲覧図書数	1,173冊	0冊	3冊	529冊	1,149冊	1,121冊
レファレンス数	0件	0件	1件	12件	28件	23件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
38人	18人	14人	16人	30人	28人	216人
46人	45人	45人	34人	43人	55人	404人
924冊	672冊	614冊	512冊	761冊	783冊	8,241冊
23件	17件	16件	14件	20件	22件	176件

※4月1日～7月29日は新型コロナウイルス感染拡大の影響により休館。なお、4月の閲覧図書数は、研究員の年度末更新手続きによるもの。

### B. 研究資料複写サービス

	申し込み件数	焼付枚数
マイクロフィルム・紙焼写真	112件	
電子複写	330件	9,703件

### C. 情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

### D. 展示

広く一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

#### 1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

#### 2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル

技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

### 3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期している。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

### 4. 展示スケジュール

常設展(名品展)と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

- a) 2020年度は同年1月末から開幕した「大清帝国展」をはじめ3つの展覧会を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月3日から6月23日まで臨時休館の措置をとった。これにより、当初予定していた会期を変更し、以下の展覧会をミュージアムで開催した。

〈企画展〉

①「大宇宙展一星と人の歴史」(会期:2020年6月24日～9月22日)

②「岩崎文庫の名品—東洋の叡智と美」(会期:2020年10月7日～2021年1月17日)

③「大清帝国展 完全版」(会期:2021年1月27日～5月16日)

〈名品展〉

「記録された記憶～東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史」

- b) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。

- c) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。

IV.普及活動—A. 研究情報普及—5. ミュージアムによる公開講座・イベントを参照。

### 5. 文京区向けの普及活動

- a) 加盟している「文の京ミュージアムネットワーク(文京区主催)」による文京ミューズフェスタ(各施設による展示、PRポスター、パネル等の掲示)に参加した。今回はコロナ禍のためチラシおよびパンフレットの配架のみとなった(12月15日～20日、於文京区役所1F)。

### 6. 入場者数

2020年4月1日～2021年3月31日における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
入場者数	0	0	522	1,787	2,086	2,583	1,914	3,508	1,837

1月	2月	3月	計
1,214	2,113	2,225	19,789

※4月1日～6月23日は新型コロナウイルス感染拡大の影響により休館。

## E. 普及広報

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

### 1. 報道実績

ミュージアムに関しての報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。

新聞：『朝日新聞』、『カトリック新聞』、『仏教タイムス』、『日本経済新聞』など。  
テレビ：NHK『あさイチ』、テレビ東京『アド街ック天国』、『東京 Good』、BSテレ東『明治の三賢人』など。

## 2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

## 3. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信した。

## 4. 小学生・中学生・高校生・大学生向けの学習支援・普及活動

- a) 東京藝術大学との協力協定により、同学彫刻科の卒業作品から一作品を選出して「東洋文庫賞」を授与し、2020年7月から東洋文庫敷地内のオープンスペースにて作品を展示した。
- b) 昭和女子大学の「東洋文庫 Student Internship Program」により、10月12日～31日の期間、同大学の学生5名をインターンとして受け入れた。
- c) 東洋女子高等学校1年生6名を対象に見学会を行った(10月22日)。
- d) キャンパスパートナーシップを結んでいる青山学院大学史学科の学生2名を、11月18日～27日の期間、学芸員実習生として受け入れた。
- e) キャンパスパートナーシップを結んでいる東洋大学文学部の学生2名を、12月3日～11日の期間、学芸員実習生として受け入れた。
- f) 筑波大学附属視覚特別支援学校の中学3年生女子生徒2名について、東洋文庫ミュージアム運営に関する職場体験を実施した(11月6日)。

## 5. 「斯波研究奨励金」の給付

2018年度に斯波義信文庫長のご寄付によって設立した特定資産「斯波研究奨励基金」と「斯波研究奨励金制度」により、2020年度、東洋文庫奨励研究員を対象に募集・選考を行い、2名に対して研究奨励金年額各50万円を給付した。

## 6. 成蹊大学との連携授業

成蹊大学との連携講座として、2020年度後期に文学部総合講義「展示から探る歴史・文化(岩崎文庫)」を担当した(オンライン開催)。ミュージアムの展示やデータベース・出版物を通じた研究成果の発信など東洋文庫の諸活動の意義について理解を深め、アジアの歴史・文化への関心を高める機会となった。2021年度も引き続き東洋文庫の諸活動を紹介する講座を担当する予定。

## 7. 東洋文庫アカデミア

東洋文庫研究員をはじめとする各分野の専門家が講師となり、所蔵資料やこれまでの研究成果などの専門知識をわかりやすく教授する市民向け講座を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により休講となった。

## F. 国際交流

東洋文庫は、フランス国立極東学院および中央研究院の歴史言語研究所・近代史研究所(台湾)、ハーバード・エンチン研究所(アメリカ)、アレキサンドリア図書館(エジプト)、イラン議会図書館、SOAS(イギリス)、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所(ドイツ)、国際テュルク・アカデミー(カザフスタン)、吉林師範大学満学研究院(中国)院と協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進した。

## G. 研究者の交流および便宜供与のサービス

### 1. 長期受入

#### (1) 外国人研究員の受入

フランソワ・ラショウ（フランス国立極東学院 東京支部長）

「近世日本の美術史・宗教史（蒐集家と文人のネットワーク、黄檗文化等々）」

「近世期の東アジアの交流史（日本・中国・ロシア・西欧）」

（2017年3月15日～2022年12月31日）

張 鵬飛（広東省警察大学院 文学部 写作研究室主任）

「《水経注》金石文献整理、“六朝石刻匯校集注”東魏西魏北周北齊卷」

（2019年11月24日～2020年11月24日）

[受入担当：窪添 慶文]

#### (2) 外来研究者の受入

なし

#### (3) 2019年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

なし

#### (4) 2020年度嘱託研究員の採用

・小澤 一郎[継続]

研究課題「近現代西アジア軍事社会史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

・中村 威也[新規]

研究課題「中国古代地域社会、非漢族研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及させることに努めた。

#### (5) 2020年度奨励研究員の任用

・中塚 亮[継続]

研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。

・多々良圭介[継続]

研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。

### 2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により未実施に終わった。

以上

2020年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東洋文庫  
代表理事 杉浦康之

2020年4月1日から2021年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業の概要は、下記の通りです。

事業内容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース、学術図書)の対象事業

①学術図書

『渤海の古城と国際交流』

[応募者:清水 信行]

2. 基盤研究(B)の対象事業

「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」

[研究代表者:本庄比佐子]  
(2015年度採用、5ヶ年・最終年度)  
2019年度分繰越(終了)

「寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから」

[研究代表者:三浦 徹]  
(2017年度採用、4ヶ年・最終年度)  
2020年度分繰越

「公論と暴力ー革命の比較研究」

[研究代表者:三谷 博]  
(2019年度採用、5ヶ年・第2年度)  
2019年度分再繰越  
2020年度分繰越

「現代新疆における少数民族の文化動態に関する研究:民族言語出版物からの検討」

[研究代表者:梅村 坦]  
(2020年度採用、4ヶ年・初年度)  
2020年度分繰越

3. 基盤研究(C)の対象事業

「『大正新脩大蔵経』編纂の実態に関する書誌学的研究:増上寺報恩蔵本を通して」

[研究代表者:會谷 佳光]

(2018年度採用、3ヶ年・最終年度)  
※1ヶ年度期間延長

「三上次男考古・美術資料の研究とデータベースの作成」

[研究代表者:金沢 陽]  
(2018年度採用、4ヶ年・第3年度)

「西洋における知識革命の物質的基盤の解明——16～18世紀の西洋古典籍の紙分析から」

[研究代表者:徐 小潔]  
(2019年度採用、3ヶ年・第2年度)

「From Transculturation to Culture-Specific Ethics: The Implementation of Confucian Ritual Forms in 19th Century Japan」

[研究代表者:Chard Robert]  
(2019年度採用、3ヶ年・第2年度)

#### 4. 若手研究の対象事業

「20世紀初頭の西・南アジア境界域におけるアフガン人武器交易ネットワークの研究」

[研究代表者:小澤 一郎]  
(2019年度採用、3ヶ年・第2年度)

## B. 三菱財団研究助成による事業

### 1. 人文科学研究助成

「モリソン・コレクションの学際的・総合的研究：近代東アジア史と「アジア文庫」形成の資料的分析」

[申請者:斯波 義信]  
(2019年10月採用、1ヶ年)  
※コロナ禍により1年期間延長

「インド古代～中世初期におけるバラモンと王との関係の研究:灌頂を受ける資格としての王の出自について」

[申請者:吉水 清孝]  
(2020年10月採用、1ヶ年)  
※コロナ禍により1年期間延長

### 2. 人文科学研究助成「社会的課題解決のための大型連携研究助成」

「20世紀後半の東アジアにおける風土病の制圧過程の検証と疫学的資料の整理・保存・公開」

[申請者:飯島 渉]  
(2019年10月採用、3ヶ年・2年目)  
※コロナ禍により1年期間延長

以上